キエフの外語学校D×D

咲護

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイスクールＤ×Ｄはお好き？

結構、ではますます好きになりますよ。

持ちこんだネタはシュワルツェネッガーの映画

でも特撮ネタなんて見かけだけで、わかりづらいはイッセーアンチが多いだかでろくなことはない。

銃火器もたっぷりありますよ、どんな闘争を求める身体の人も大丈夫。

どうぞ読み進めてみてください。いい射撃音でしょう、余裕の音だ、火薬量が違いますよ

一番気に行ってるのは……　銃が手に入りやすいことだ

というわけで、性懲りもなくネタぶちこみやがった

注意

原作は昨日逮捕された。（原作警察の）警察署長の娘とヤッちまって

赤龍帝の籠手はオリキャラのものだ

イッセーを中心にリアス眷族が増えてチート化

筋肉で解決しがち

頻度は低いがたまに出てくるアクション映画ネタ

元ネタ付き神滅器

ネタを入れないとタヒぬ病気

目次

旧校舎の州知事

Bullet 1 ―― 1

Bullet 2 ―― 6

Bullet 3 ―― 12

Bullet 4 ―― 19

Bullet 5 ―― 24

Bullet 6 ―― 30

Bullet 7 ―― 36

Bullet 8 ―― 43

旧校舎の州知事
Bullet l

「あの女の髪の色と同じだ」
血塗れの手を観ながら、俺は呟いた。
アカい――　ソ連国旗のように鮮やかなアカ髪。

俺は兵藤・ダッチ・一誠。近しい名前の奴は「イッセー」だとか呼びやがる。
今は高校二年生だが、そのうち6年は小学校にいた。
知らない人間にも「あいつは……　イッセー!」とか言われたとか言われてねえとか。
人気者みたいだねえ、ボディーランゲージで愛情を示してる。
人気者だあ? 寝言言ってんじゃねえよ。
俺はなぜか5変人3変態に含まれてる。おかしな話だ。こないだちょっとグラウンドに空挺降下して塹壕を掘ってただけなんだがなあ?

どうでもいい話だが俺にも恋人ってやつができた。天野夕麻だとかいう男にだらし

のないバカ女が俺に告白してきた。
　でだ、その女とデートをしてたんだがよ、帰りがけの糞溜めみてえな公園で殺されかけた。
「おめでとう、イッセー君。君は消去された」
「ちょっと待って、ここで殺したらダメですよ、待って、とまれ！
　うわあああああああああああ！」
　という経緯で冒頭の文章に至るわけだ。

　畜生、来週はあいつらとサンタバーバラの北の小島でにぎやかにドンパチやる約束だったんだがなあ……
「頼む、助けてくれ……」
「助けを求めたのはあんたかい？」
　アカ髪……　そこで俺の意識のバッテリーが切れた。
「見たこともない神器（セイクリッドギア）　それも神滅器（ロンギヌス）と来た。」
　この女の手に持ってるのはあと2手で詰みそうなチェスの駒。
「どうせ死ぬなら私のために生きなさい」
　……　カッコつけてるとこ悪いけどねえ、その駒作動してないよ。

「えっ駒間違えたかな。んなこたない、コイツには兵士（ポーン）の駒だって決まってる。ダーティーハリーだってそういってるんだから。動けこのポンコツが、動けってんだよ！」
兵士（ポーン）の駒を握りしめて何する気だ？。読者たちに何か見せてえんだろ。へへ、ストリップかな？
「これで変異（ミューテーション）の駒（ピース）ができた。これで行けなかったらあの魔王の臓器を売るしかないわね。」

「最近、夜になると妙に血が騒ぎやがる。逆に朝に対してひどく弱ってる。」
学校には行かなきゃならんから行くしかないからなあ。

駒王学園。創立から３６年たってるがそのうち２６年は女子校だった。男子はしばし後れを取りましたが、今は巻き返しの時です。
しけた顔をした俺につるんでるやつの一人、松田が声をかけてくる。
「エロ本のニューモデルです。激ヤバだでぇ」
「（ちらっ）……　資本主義者め」
「おーい、怒るこたあねえだろ～？」
「俺は今寝不足なんだ、もう一週間もまともな睡眠取ってねえやってられっか！」

ともう一人、元浜ってやつが話しかけてくる。
「何やらかしたらそうなるんだ?それはそうと、放課後にパーティーやろうぜ」
「パーティーは好きだ」
「パーティーがお好き?結構、ではますます好きになりますよ。今日はビデオのニューモデルを仕入れてきたんだ。こいつがほしかった。ようやく手にいれた」
「というわけで、また放課後につるもうぜ、イッセー」

「まずいな、時間が遅くなってしまった。」
すっかり夜になってしまって、俺は急いで戻るべく、走って帰ってる。ここ最近の飛躍的に上がった夜の運動能力でハイスピードで戻ってくる。
突然、スーツ姿の変なオッサンが現れる。
「とんでもねえ、待ってたんだ」
オッサンは右手に光る槍を呼び出して、俺に向かって投げてくる。
「ぐあっ……　なんだこれは!この俺をこんな安物の槍で刺しやがって!」
(痛え……　しかも傷口のうちが分から毒が回ってるようにも感じられるのが厄介だ……)
「痛いかクソッタレ、当然だぜ、悪魔が光に勝てるもんか」

「おい、今なんといった？」
「主もいない、堕天使の我に刃向かう。『はぐれ』なら嬲り殺しにできる」
「ごきげんよう、落ちた者。こいつにちょっかいを出すなら、ある朝あなたが目覚めた時、ベッド脇のコップに大事なタマタマが浮かぶことになるわ。」
突然、誰かが現れる。俺はこの人に見覚えがある。
リアス・シンディ・グレモリー。ソ連国旗のようにアカいロングヘアーのソソる女だ。
「我は聖人君子た。タマタマなんざ必要としない。」
「では目玉を穿り出されるのはどうかしら？」
「我に脅しは効かぬぞ、アカ髪の悪魔のお嬢さん。眷族悪魔を殺されたくなければ、ソ連式で監視しろ。ＯＫ？」
リアスは手に黒い塊を作り出す。完成した黒い塊を堕天使の男に撃ちこむ。
「ＯＫ！（ズドン！）」
堕天使の男は跡形もなく消え去ってしまった。
「さて、これで問題解決ね。兵頭一誠君、あなたは無事かしら？」
しかし一誠は何も返さない。それどころか呼吸すらしていない。リアスは治療をするべく、一誠を彼の家に連れていってしまった。

Bullet 2

「ロクでもない夢を見ちまった……」
突然、背中に黒い鳥のような羽を生やした男に安物の槍を刺された夢を見てしまった俺は目を覚ました。いつものような朝だ。
ふと、違和感を感じる。いつも着ているはずの服がないのだ。言い換えれば、裸なのだ。
「……　んん……　すーすー」
まだ俺は目を覚ましてなかったらしい。そうじゃなきゃ隣に裸のソソる女なんて横で添い寝してないはずだぜ。へへ、ストリップかな？
「イッセー！いつまで寝てる気だ？親の期待を裏切るのか、３６０度も！」
「１８０度だ歴史的馬鹿モンが！」
そこで、リアスが最悪のタイミングで目を覚ました。
「おはよう少年、今朝は冷えるわね、ええ？」
ガチャッ
母さんが部屋のドアを開けた瞬間、リアスが体を起こす。それもすごくにっこりとし

た顔でドアの方を見てる。
「おはようございます。」
「大佐ぁ、腹はどんなだ？」
「こっちへ来て確かめろ！」
「いいや結構、遠慮させてもらうわ。昨日刺されたお腹はどんな感じかしら？」
（なんで先輩が俺の夢の話を……）
「夢だと思ったでしょうけど、昨夜は現実よ。お腹の傷はなんとか一晩で治せたわ。あなた人間なの？って言おうと思ったけどあなたを悪魔に転生させたのは私だったわね」
とリアスは軽く舌を出してごまかした。
学校に行く間、ずいぶんいろんな連中に目をつけられてしまったらしい。いろいろと悪意やら羨望やらが入り混じった視線が俺に向けられている。
「放課後暇かしら？」
「クソして寝な」
「どーも。最近の男子学生はきついや……　ってそういう話をしたいんじゃなくて、放課後に重要な話があるから来なさいって話をしたかったのよ」
「なるほど。そういうことなら大丈夫っすよ」
「あとで使いを出すわ。頑張りなさい、また会いましょう」

放課後、隣のクラスのイケメン王子こと木場・ディロン・祐斗がやってきた。
「リアス・グレモリー先輩の使いだって言ったら分かるかい？」
「ああ、分かるよ。次に君はついてくるように言ってくるんだろ？」
「そうだね、付いて来てくれよ」
「兵藤一誠の奴が来ましたが入れますか？」
「その前にボディチェックよそれくらいわかるでしょう？」
木場に連れられてやってきたのは旧校舎の「オカルト研究者組合」という謎の組合の部室だった。ボディチェックをさせたのは黒髪の東アジア系美人の姫島・ヘレン・朱乃。
「オカルト研究者組合？なんだこれ」
「僕が所属してる部活だよ。部長はリアス先輩。あと二人ほど組合員がいるんだけど……」
「そこのソファで伸びてるやつは何だ？」
「ここに住んでる」
白髪で小柄の少女、塔城・ディナ・小猫がソファの上で寝ている。
シャー、というシャワー音が部屋の奥から聞こえてくる。朱乃はタオルを持って、シャワーカーテンの奥に消えていく。
Ａ Ｆｅｗ Ｍｏｍｅｎｔｓ Ｌａｔｅｒ

「来たわね、イッセー。ようこそ、オカルト研究者組合へ。我々はあなたを眷族として歓迎するわ、悪魔として」
「何だって？」
「先週の日曜日のことを覚えているかしら。あなたは先週の日曜日、天野夕麻とかいう男にだらしのないバカ女とデートをして、糞溜めみたいな公園で殺された、という情報は間違いないようね。」
「なぜそれを知っている？Ｆ○ＩかＣ○Ａでも雇ったのかい？」
「私の情報収集はＣ○Ａ並みよ。主に祐斗が得意としてるわ。で、話を戻すと、あの男にだらしのないバカ女は昨日イッセーを殺しにかかったサイコ野郎と同じ堕天使という存在よ」
「なぜ俺は殺されなきゃならんかったんだ？あのカラス女やあのカラス野郎は何のために俺を殺そうとしたんだ？」
「その話をするのにちょっと長くなるけど大丈夫かしら？」
「ああ、問題ない」
　イッセーの言葉を聞いて、祐斗が説明を始める。
「あの堕天使から神器（セイクリッドギア）ってワードを聞かなかったかい？」

「聞いたな。そのワードはなんなんだ？」
「ある特定の人間に宿るとんでもねえ力だ。たいていは人間社会の中で名前を残せる程度のものだが、まれに悪魔や堕天使を凌駕するようなパワーを持ったものも存在する。神滅器（ロンギヌス）と呼ばれている。」
　イッセーは少しずつ理解してきた。それとともに、あのバカ女への怒りがふつふつと湧いてきた。イッセーはそれを抑えて、リアスにもう一つ、重要なことを聞く。
「そんで、なぜ俺を悪魔とやらに変えた理由はなんなんだ？」
「それはいわゆる、コラテラルダメージに過ぎないわ。イッセー、あなたの命を守るための、致し方ない犠牲よ」
　そう、イッセーが生きながらえるためには悪魔の体にするしかなくなったのだ。人間の体では、絶対に治らなかった、というのがリアスの弁だ。
「……　つまり、もう俺は人間じゃないってことか」
「そうなるわね。納得いったかしら？」
「なんとなくね。つまりあんたは俺の上官ってことでいいんだな？」
「ええ。そしてあなたは私の眷族として、よろしくね。ああそうそう、私を呼ぶときは部長と呼びなさいね」
「了解です、将軍！」

「しょ、将軍……　まあいいか」

こうして、リアス・グレモリーの眷族として、イッセーは正式に新たな命を吹き込まれたのだった。

Bullet 3

「悪魔社会は階級がすべてよ。守れない者は、罰を受ける」
　といった具合に、リアスが悪魔の社会について説明している。悪魔社会は基本的には階級社会だが、チャンスを生かし功績を挙げることで成り上がることができるということを学んだ。
「転生悪魔でも爵位を与えられて眷族をもつことが許されたりするのよ」
「つまりあれか、ハーレムを持ちたいって言う願望や自分だけのコマンドー部隊を編成したいという願望もかなう可能性はゼロじゃないってことだな?」
「ああそうだ」
　とは言うものの、新兵のイッセーにはそもそも下積みが全くない状態からのスタートだ。修業を積まなければならないのは言うまでもない。
　イッセーの成長スピードは実際に速かった。魔方陣からジャンプするという通常の悪魔が使う方法ができなかったがために私物のモーターバイク（ハーレーダ○ッドソン）を駆って依頼人のもとに行く。このやり方が受けたのか、一定の固定客がついたようだ。

そんなある日、今日は部活がない放課後だったために、イッセーはバイト先であるアラモ銃砲店に行く途中のことである。
「はわう！」
「ん、何だ？」
イッセーは背中に感じた衝撃に反応して振り返る。そこには、シスター服を着た金髪の娘が転んでいた。近くには旅行鞄があった。
「大丈夫か。特にまずい転び方をしたわけではないからどうにか大丈夫だとは思うが」
「大丈夫だと思います。私、アーシアをお助けいただいてありがとうございます」
「この場合俺も名乗るべきだろうな。俺はイッセー。兵藤一誠だ」
このシスター、アーシア・アルジェントの話によれば、彼女はこの町の教会に赴任してきたという。公園でケガをしていた少年を神器（セイクリッドギア）の力で治療を行った。あとは目的地の教会についたとき、体中にいやな汗がながれ、悪寒が走った。
「そ、そうだアーシア、俺はバイトに行かねばならないんだ。オダチ・チービア・ダスビダーニャ」
「すいません、ロシア語はさっぱりなんです」
「がんばれよ、また会おう」
といった感じにバイトに向かっていったその翌日

「二度と教会に近づいたらダメよ」
「道案内でもかい？」
「そうね、次は命がないわよ」
「ヒュー、おっそろしい話だ」
「あとはそうだ、教会の関係者にも近づくと命がないわよ。特に『悪魔祓い（エクソシスト）』は我ら悪魔の仇ね。神の祝福を受けたあいつらの力は我々を滅ぼすこともできるってのは恐ろしい話だよなあ？命が惜しければ、教会に近づかないことよ。ＯＫ？」
「マム、イエス、マム！」
「おい、リアス！」
「なんだよ!?」
　いつの間にやら朱乃がイッセーの背後に立っていた。
「大公からテレックスに討伐依頼のメッセージが来ています」
　――はぐれ悪魔。
　そういう存在がいるという。爵位もちの悪魔の下僕になったものが、主を１８０度裏切ったり主を殺したりして脱獄した悪魔のことだという。そいつらはほかのところで暴徒化したりして大変なことになるというらしい。つまり、悪魔としても天使や堕天使としても危険な存在であると考えられたがために討伐が行われているというらしい。

（だから俺があのくそったれのカラス野郎に殺されかけたってのか）
「ここよ」
リアスが廃倉庫の前で立ち止まる。
「……　血の匂い、間違いないです、ここにいます」
「誰か体が残ってる人間はいるか？死体でもいい」
「瀕死ですが一人」
小猫が匂いではぐれ悪魔の気配を感じ取ると、イッセーはばれたらまずいのか、人間の存在を問うた。
廃倉庫の扉を少し開ける
「全員、目をつぶって耳をふさぐように。まずはスタグレを投げ込みます。」
ピカッ！キイイイイイイイイイン
音が収まるとともに祐斗を先頭に小猫、一誠が電撃的に倉庫に侵入する。朱乃、リアスと続いた。一誠は犠牲となった人間を倉庫の外に運び出す。
一誠は犠牲になった人間の名前を知っていた。須古泰助（すこたいすけ）。一誠のクラスでは副委員長を務めていて、元浜のせいで風評被害を受けている不憫な存在であった。
倉庫内では、祐斗が生成した安物の剣で件のはぐれ悪魔バイザーに5回斬りかかっていた。

「畜生！この私を安物の剣で斬りやがって！」
それを気にせず、次に小猫が垂直跳びをした後にバイザーのみぞおちにゾウの肛門並みの穴が開くような一発をぶち込んだ。たちまちバイザーは気を失いかける。
「そういえば悪魔の駒（イーヴィルピース）についての説明をしていなかったわね。イッセーが爆弾みたいなのを投げ込んでたから抜け落ちちゃったわね」
木場祐斗はスピードにバフがつく騎士（ナイト）の駒、塔城小猫はパワーと防御にバフがつく戦車（ルーク）の駒であると説明した。
「刺激がほしいですか？そしたらあげましょう、ビリビリするような刺激ですわ！」
と、朱乃が掌を上にかざすとバイザーに雷が落ちた。
「うおおうおおおおおおおう！」
「朱乃は女王（クイーン）の駒よ。先述の騎士（ナイト）、戦車（ルーク）、それとあと兵士（ポーン）と僧侶（ビショップ）のすべての性質を兼ね備えているわ。私の眷族だと2番目に強いわ」
「とどめお願いしますわ、リアス」
「そうね、はぐれ悪魔バイザー、最後に言い残すことはあるかしら？」
冷たい目をしたリアスにバイザーは答える。
「くっ、殺せ……」
「そう、なら消し飛びなさい。」

そういって、リアスは彼女の魔法でバイザーを消し飛ばした。
「討伐完了。イッセー、さっきの人はどこにいるのかしら？」
「ああ、それならすぐ治療ができるように出口の脇の方に寝かせてある。」
「そう……なるだけ人間のまま命を助けられたらよいのだけど」
リアスはそう言うが、イッセーが須古泰助の脈を見ても動いていないことが分かる。
「動かないけどどうしますか、将軍」
「救急車をよ……いや、むしろ……」
「どうしたんです、部長？」
リアスが救急車を呼ぶのに詰まったのをみて祐斗が問いかける。
「この少年、いけるわね。駒の適正は……足りないか」
「その駒を貸してもらえるか？1つあればいけるか」
「え、ええ、どうぞ」
リアスが兵士（ポーン）の駒をイッセーに渡すと、イッセーは駒をグッと縦に握りしめた。するとどうだろう、その駒で須古泰助の転生を成功させた。
「いっつっ……いったい何があったんだ？」
「よう副委員長、ようやくお目覚めか」
「俺は……何があったんです？」

「あなたが襲撃されたのを助けたのよ。ここまで運び出したのはイッセーよ」
「そうか……兵藤、恩に着る」
「もう少し詳しい話をしたいのだけれど、今日は時間も時間だし、明日説明するわ。みんな、今日は解散。」

Bullet 4

「須古泰助君、私は君を悪魔として転生させたわ。よろしく、私の眷族」
イッセーにもやった悪魔の駒（イーヴィルピース）の話をやった後、リアスは神器（セイクリッドギア）の説明に入る。
「そしたら自分が一番強いと思うものを思い浮かべてみて」
「は、はい」
泰助は意識を集中させて、エネルギーを左手に編み上げる。突然、左腕がまばゆい光を出した。
「な、なんだこれ!?なんだよ!?」
左手の手の甲の部分に宝玉がついた赤い籠手のようなものが現れた。それを見たリアスは驚いた。それも無理はない。
泰助の持っていた神器は神滅器（ロンギヌス）の中でも超級の一つと言われている赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）だったのだ。赤龍帝の籠手の元となったのは、二天龍と呼ばれる二匹の竜の一つ、赤龍帝ウェルシュ・ドラゴンである。この二天龍の争いが天使・悪魔・堕天使の争いを巻き込んだが故、聖書勢力が寄ってたかって二天龍を攻撃し始めた挙句神器に封じ込められた、というのが経緯らしい。

赤龍帝の籠手の特性は、１０秒ごとに持ち主の力を倍増させる。時間を追うごとに力が高まるため、時間さえ足りれば魔王や神さえも滅ぼすことができる。とはいうものの、使いこなしにくいという神滅器にありがちな特性がある。とはいうものの泰助は体に覚えこませることに長けているがために、すぐにある程度のレベルまでは行くだろう。

イッセーはいつものようにモーターバイクを駆って依頼人の元へ向かった。今回の顧客はイッセーが初めて対応する人だった。

（おかしいな、ドアが開いてる）

依頼人の家のドアが開いていることに違和感を覚えたイッセーは神器で編んだソ連製のポドブィリン９．２ミリオートマを右手に持って慎重に侵入した。リビングに入ったとき、イッセーは悪寒の正体を理解した。人間の惨殺死体が逆十字で磔にされていた。死体の横には血文字が書かれていた。

『戒律がすべてだ。悪いことをする人は、罰を受ける』って、聖なるお方の言葉を借りたモノさ」

後ろを振り向いたイッセーはヘッドショットを狙ったが、狙いがそれて右目にあたった。白髪の神父が立っていた。

「なんのようだ牧師さん？こっちはこんな殺人事件の現場に駆り出されてイライラしてんだ。今すぐ警察を呼んでやろうか？」
「残念ながーら！警察を呼んだってムダ無駄！だって僕ちんに正義があーるから！俺の名はフリード・クック・セルゼン。どうした怖いかクソ悪魔。当たり前だ、元教会の悪魔祓いだ、料理してやる」
「悪魔祓いは俺の大好物だ。晩飯にもいい、腹も減ってるしな」
イッセーの脳は凍り付いた。心臓は早鐘を打ち、頭に血が上るのを感じた。
「悪魔はクズ、そしてそれを利用するのはもっとクズ！クズを殺すことは正義！というわけでくたばりやがれ！」
セルゼンは光でできた剣を抜いて、イッセーに切りかかってくる。イッセーはソ連製のポドブィリン９．２ミリオートマをホルスターから抜く間にセルゼンに肉薄される。光の刀身をイッセーは避けたが、左足を貫かれたような感覚を覚える。セルゼンは左手に撃った後の拳銃を持っていた。
「なにをしている？」
横からアーシアが口をはさんできた。
「お前が殺した悪魔の顧客の件で、グリゴリ幹部にかみつかれっぱなしだ！お前がこの町でやらかしたスタンドプレーのお陰でレイナーレがバラキエル氏には意地悪される

し。いったい何をしたいのか、隠さずに報告しなさい！」
「職務を全うしてるだーけじゃないかアーシアちゃーん」
「お前はカトリック教会の権威をここまで落とした張本人だ！あと今度ちゃん付で呼んだら裁判所にセクハラで訴える！」
「なんで……アーシア……内輪もめなんてしてるんだ？」
「悪魔くんは黙ってろ、次は心臓をやってやろうか？」
「イッセーさんが悪魔？おもしろい冗談を言いますねえ。今度余計なこと言うと口を縫い合わしますよぉ？」
「いや、実際悪魔だし」
アーシアとセルゼンが内輪もめしてる間に、リアスはじめ眷族たちがやってきた。
「これはいったいどういう状況？」
「とりあえず銃を配ってから説明しますよ、将軍」
イッセーはダーティーハリーだって使ってるマグナム４４を配り始めた。
「依頼人のところに来たら依頼人が殺されてた。牧師とシスターのコンビだったんだが神父が暴走して依頼人を殺したからシスターがブチギレてこの状況に至る」
「な、なるほど……」
すると、セルゼンは悪魔の気配は増えていることに気づいた。

「冗談じゃーないね、悪魔の団体様だ。それも銃もちの」
「おいセルゼン！」
「なんだよ!?」
「撤退命令がドーナシークさんから出てます。ずらかりますよ。それともここで悪魔の皆さんに殺されますか？」
「うーい、それは仕方ないか」
　というと、アーシアとセルゼンの足元が光りだして、逃げられた。
「いっつ、まだ痛みが残ってるな。ところでグレモリー将軍、撃たれて15分は経ってるはずなのに一向に消える気配がないのはどういうことだと思う？」
「祓魔弾ではなかったのではないですか？神父がいたあたりに薬莢が落ちてますが、どうもただの実弾のようですわ」
「ドジですね……」
「とりあえず私たちも離脱するわよ。イッセー、薬莢だけ拾っておいてくれるかしら？」
「了解っす」
　翌日は足に力が入らず、イッセーは学校を休んだ。

Bullet 5

依頼人が殺害され、イッセーが負傷した翌日、イッセーは学校を休んで公園に来ていた。

「クッソ脚が痛い」

イッセーはベンチに座って呟いた。彼には足りないものが多すぎる。筋力は「筋骨隆々のものすごい男」と言われているためさておき、魔力や近接戦闘に関する能力が足りなすぎる。瑕が癒えた後にトレーニングをやり直さなければ。腰を上げて、家に帰ろうとした時だった。

「イッセーさん?」

「アーシア?今夜暇かい?」

「クソして寝てくださぁい」

「あ、どうも。最近のシスター、きついや。ところで俺は昼飯にしようとしてたんだが」

「仔牛の煮込みが死ぬほど食べたいんですけど」

「この辺でそれを食えるところって聞いたことないぜ」

「じゃあペパロニのピッツァで」

「それもいいが手軽に食えるものがあるんだな」
「名前だけは聞いたことありましたが実在したんですねぇ……」
　イッセーとアーシアはハンバーガーショップ「マクダニエルズ」、「マクダ」にやってきた。システムを知らないことも問題だが、日本語の問題もあるため、イッセーはアーシアの注文を援助することにした。
「中身はなんですかねこれ」
「知らない方がいいわ」
　ハンバーガーの食べ方を知らないアーシアのために、イッセーは少しずつ手本として食べていく。アーシアもそれに習って食べ進めていく。
（アーシアに何があったかは分からなかったが、何かに怯えているようにも見えた。）
「アーシア、Ｌｅｔ，ｓ　ｐａｒｔｙ．」
「ここでうまく曲がってストレートで……」
　イッセーはヘアピンに合わせてロスの少ないブレーキから立ち上がりでトラクションをかけてスピードを上げていく
「速い、一気に後ろを突き放していきます！」
『ＦＩＮＩＳＨ！ポディウムの頂点にあなたが立ちます！』
　イッセーは後ろにいたはずのアーシアがいないことに気づいたが、近くのクレーン

ゲームコーナーにアーシアがいた。
「どうしたんだ?」
　みると、アーシアは筐体の中の人気キャラクター『ラッチューくん』のぬいぐるみを見つめていた。ラッチューくんといえば日本から発信された世界的に有名なキャラクターの一つである。教会や修道院で暮らしてきたアーシアですら知っているという事実を鑑みればどれだけ有名かが分かるだろう。ちなみに隣の筐体にはアメリカンコミックスのキャラクター、ターボマンのフィギュアが入っていた。
「アーシア、ラッチューくん欲しいのか?」
「え! いいえ、その……」
「OK任せろ。お土産ってことになるだろうから取ってみるぜ」
「お、お願いします」
　5回くらい使ってようやく手にいれた。
「よし! 手にいれたぜ! 日本のお土産だよ」
「ほ、本当にいいんですか?」
「ああ、遊びつくそうぜ」

「遊び過ぎた感が半端ない」

「こんなに遊んだのは生まれて初めてです……」
イッセーたちは夜になると売人、ポン引き、淫売どもの巣窟になる糞溜めみてえな児童公園にやってきた。たまに子供が落っこちてるヤクやピンクチラシを拾ってきて大変なことになるらしい。
「まだいろいろと痛むな」
「大丈夫ですか?」
「歩けないくらいのことではないが正直なところバイク持ってくりゃよかった」
「それでは、ズボンのすそを上げてもらっていいですか?」
昨日セルゼンに撃たれたふくらはぎをアーシアに見せる。アーシアは手をかざして、治癒の力を使う。するとみるみるうちに銃創が消えていった。
「おお、すごいな。ありがとう、アーシア。助かった」
それからアーシアは過去を話してくれた。治癒の力によって教会に祭り上げられたこと。ある日教会の前に倒れている人を治癒したら悪魔だったこと。信じていた人間に裏切られたこと。教会を追放されたこと。つらかった過去だっただろうが、アーシアはしっかり語ってくれた。
(全知全能の存在が何をやっとるんだ。まあ、教会の人間のさじ加減なんだろうが)
「アーシア、私と一緒に新しい世界を作ろう。きっと毎日が楽しいぞー」

「それは無理ね」
　横から聞き覚えのある吐き気がするような声が聞こえてきた。イッセーはとっさにＵＺＩ９ｍｍサブマシンガンを召喚した。
「あらあらイッセー君生きてたのねえ。しかも悪魔って。クズじゃん」
「いきなりしゃしゃり出てきて何の用だ、男にだらしのないバカ堕天使」
　侮蔑的な態度でレイナーレは返す。
「アーシア、逃げても無駄よ。その子は私たちの所有物なの。返さなかったらある朝起きたら布団脇の茶碗の中に大事なタマタマが浮かぶことになるわよ」
「俺は聖人君子だ。タマタマなんぞ必要としねぇ」
「じゃあ目玉を抉り出してあげましょうか？」
「俺に脅しは効かないぜ、男にだらしのないバカ女」
　レイナーレが光の槍を手に呼び出した。
「……いやです。あの教会になんて戻りたくありません。あたし帰るよ、殺人サイコパスのお遊びには付き合いきれないです」
「そういわなくていいじゃない、アーシア。あなたの神器（セイクリッドギア）は私たちの計画に必要なのよ。あまり迷惑をかけると、分かるわね？」
　とはいえ状況が不利なのに変わりはない。ＵＺＩ９ｍｍをレイナーレに向けて構え

る。レイナーレは光の槍を少し短くしてナイフのようにした。どうしたものかとイッセーは考える。

（ごめん、アーシア！）

「こいつに手を出すと撃つぞ！」

卑劣！アーシアを人質のように扱ってレイナーレから護ろうとしている。

「無駄よ。フリード！」

後ろからフリードに鈍器で殴られ、イッセーは気絶した。

気づくとアーシアはいなくなっていた。

Bullet 6

「何度も言うようにあのシスターの救出は認められない！いくら堕天使に無理やり利用されていようがいかに貴重な神器（セイクリッドギア）をもってようが無理なものは無理よ！」
イッセーは旧校舎の部室に行ってリアスを説得しようとしたが、それはかなわなかった。
「儀式だがなんだか言ってたがあのカラスどものことだ、真っ当なはずがない。今見逃せば俺は悔やむだろう。あなた方を巻き込む気はない。ただ許可がほしいだけだ」
「今のあなたがどうやって立ち向かうの？いくら肉体が強靭でも光属性の攻撃を食らえば大変なことになるのは言うまでもないはずよ」
そこに朱乃がやってくる。
「部長、少し耳を」
朱乃はリアスに何やら耳打ちをした後、あわただしく出ていく。
「イッセー君、キミが無謀なことをするということは分かる。だがキミがその状況を変えようと思うなら、僕は後押ししようじゃないか。」
「兵藤、アーシアさんという方を救いたいんだろう。この町の教会ということは間違い

ないのか？」
「ああ、そうだ」
「すごく危険だとは思うが俺はどうにかできると思っている。戦闘ではどうにもならないがサポートはできるはずだ」
「イッセー先輩、祐斗先輩、泰助先輩。私も行きますよ。私だって戦える。先輩方だけに行かせるわけにはいきませんから」
　イッセーは強力な仲間を得て、教会に向かっていった。
「小猫はともかく泰助、銃は要らないか？」
「一応剣道やってたから剣があると助かる」
「防火斧でいいなら貸せるぞ」
　イッセーはホルスターにデザートイーグルを収納、あとは防火斧、手榴弾５個、スティンガー、ＵＺＩ９ｍｍを準備した。防火斧は泰助に渡した。
「行くぞ、ターボタイム！」
シューーーーー！ドカーーーーーーーーン！
　扉をスティンガーで破壊して一斉に聖堂に侵入する。聖堂にはフリード・セルゼンが立っていた。
「おやおやぁ？この前のクソ悪魔の団体様じゃーあーりませんかー？あのクソシスター

を助けに来た感じなんだろー？でも無駄！もうすぐ死ぬところだから！というわけでくたばれくそったれ！」

祓魔銃を撃とうとしたセルゼンは弾が切れていることに気づく。

「くたばるのはお前の方みたいだな、牧師野郎！」

「このクソ悪魔は牧師と神父の違いすら分からないみたいだねえええええええ！」

「そんなもん今はどうでもいい！とにかくこの斧の錆となれ！」

泰助が防火斧で頭を割りにかかる。

「イッセーくん！キミはアーシアさんのところに行くんだ！この神父は僕たちでやる！」

「了解！行くぞ、ターボたーいむ！」

イッセーがアーシアの儀式の場所に行っているのをあえてセルゼンは追わなかった。祓魔弾切れの状況でいかにして3対1を覆すかを考えていた。

（こういう時、「馬鹿野郎、俺は勝つぞお前！」って日本語でいうんだっけ？）

セルゼンは最近覚えた日本文を思い出しながら戦闘に入る。

リアス・グレモリー眷族の3人は数的有利を生かしたいところだ。小猫は近くに並んでいた長椅子を持ちあげて、セルゼンに向かって投げた。

「しゃらくっせえ!!くたばれ!!」

長椅子を両断すると、近くにいた祐斗に斬りかかる。祐斗は持っていた魔剣でセルゼンの光の剣を受け、刀を返そうとするがそこにセルゼンはおらず、泰助を襲っていた。泰助は斧で件を受けようとするがリーチが不足して、負傷する。

「どうだ！これが光の力だ！このままじわじわと……がっ！」

「……よそ見は禁物」

セルゼンが泰助に気を取られているうちに小猫はセルゼンを蹴り飛ばした。泰助は光の攻撃を受けたがために力を失いつつある。

「頼む、ブーストしてくれ！生命力を!!」

〝Ｂｏｏｓｔ!〟　〝Ｂｏｏｓｔ!!〟　〝Ｂｏｏｓｔ!!!〟

泰助は自分の神器（セイクリッドギア）、赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を展開して生命力を高めようとしている。

〝Ｂｏｏｓｔ!!!〟　〝Ｂｏｏｓｔ!!!!〟　〝Ｂｏｏｓｔ!!!!!〟

「泰助君、無理はしたらダメだ！この神父は僕らがやる！小猫ちゃん、できればこっちの方にそいつを投げてくれ！」

小猫が投げたセルゼンに祐斗は斬りかかる。

「やっべー。死ぬかと思った。これ以上はここにいれない！んじゃ、ばいちゃ！」

セルゼンは煙玉を投げて、消え去った。

「泰助君、どんな感じ？」

「生命力を2の6乗倍させてるけど結構つらいなこれ。木場、回復か治癒いけるか？」
「やっては見るがどうだろう。あまり得意ではないからね」
祐斗は泰助に治癒魔法を使うが、あまり効果はなさそうだ。朱乃の方が得意なのだろう。

時間はさかのぼって教会の外。リアスと朱乃は冥界の大公から来たはぐれ堕天使の集団の討伐依頼でやってきた。
「ここね、朱乃！囲まれると不利だからうまく一人ずつ攻略していくわよ！」
リアスはそういうと、教会の尖塔の上に立つ女堕天使ミッテルトに向かって滅びの魔法を放つ。ミッテルトは何も言えないまま消滅してしまった。一方の朱乃、教会を挟んで反対側の木の上に飛んでいく。
「な、だ、誰よ!?」
女堕天使カラワーナは光の槍を繰り出して朱乃に投げようとしたが、その前に朱乃の雷の前に屠られた。残る堕天使はドーナシークとレイナーレだけだ。そのレイナーレは教会の中で儀式を行っている。
ドーナシークが朱乃の後ろから光の槍を投擲してくる。朱乃は身に降りかかる危険を察知して槍を避ける。

「うっふふふふ……狙いは悪くないですが、残念ですわ」
　朱乃は雷撃でドーナシークに反撃する。所詮は下級堕天使でしかないドーナシークは朱乃の強烈な雷撃で無に帰した。
「朱乃、教会の中に行くわよ。おそらくイッセーたちもそこにいるはずだから！」
「了解ですわ部長」

Bullet 7

イッセーは教会の地下に設けられた儀式場にやってきた。儀式場にはレイナーレ、十字架に磔にされたアーシア、大人数の神父がいた。神父はみな光の刃を発生させる剣を持っている。誰にも見つからないうちに手榴弾を投げ込んだ。

ドーーン！

手榴弾は爆発して密集していた神父たちを吹き飛ばした。戦闘になれていない神父たちは混乱しているすきに2個目、3個目の手榴弾を投げ込んだ結果、神父たちは全滅した。

「な、何があったのよ!?いきなり神父たちがばくさぐうっ！」

レイナーレも焦り始めたところで心臓に銃弾を浴びた。

レイナーレは銃弾が富んできたと思われるところに向けて光の槍を放つ。しかしそこにはもうイッセーはいない。イッセーはレイナーレに肉薄すると、デザートイーグルをレイナーレに向けて射撃した。しかし、イッセー自身がとっさにデザートイーグルを撃ったために、狙いは外れ、逆にレイナーレに背中を抑えられることになった。

「残念だったわねえ、アーシアを助けられなくて。イッセー君、ここでアーシアの死を見

届けてからあなたを殺してあげるわ。」
イッセーが手錠をかけられている間にアーシアの神器（セイクリッドギア）を抜き取る儀式は進んでいく。
「レイナーレの姐さん、加勢にきましたぜ！」
祐斗たちとの戦闘から逃げてきたセルゼンが儀式場に降りてきた。
イッセーは手錠を自力で外そうとしたものの、難しいようだ。近くには外科用の手術器具が乱雑においてある。イッセーの算段は決まった。
（しかしどうやってこの手錠を外したものか）
イッセーは手錠を外す方法を考えている。
「あああああああああああああああ！」
「あっはははははは！これで私も至高の堕天使に至るのね！」
アーシアの神器は奪われ、レイナーレの手に渡ってしまった。アーシアの肉体は急速に衰弱していき、死へのカウントダウンは順調に進んでいっている。
「イッセー君、死ぬ前に何か私に言っておくことはあるかしら？」
「ある。じきお前さんをとっ捕まえてぶっ殺してやる」
「ふーん、で、どうやって？」
「まずお前さんをとっ捕まえて楯にして、そこにいる見張りの牧師を殺る。そこに置い

てある外科用のトロカールでな。それからお前さんの首を圧し折るってのはどうだ？」
「どうやってやるつもりなのかしらねえ？」
「手錠をかけられているのに？……外したよ！」
枷がなくなったイッセーはレイナーレを捕まえて楯にして、床に転がっている外科用のトロカールを掴む。セルゼンは光を発生させる剣を抜いてトロカールが飛んでくることに備える。トロカールはセルゼンの眼球に突き刺さって気絶した。どうあがいても失明は避けられないだろう。イッセーはそれからレイナーレの首を圧し折って気絶まで持って行った。人間ならば脊椎損傷で大変なことになるのは目に見えている。

イッセーはアーシアを磔から解放したが、アーシアの命はもはや尽きてしまった。
「とりあえず上に行こう、木場たちが待ってる。」
まずはアーシアを背負って上の聖堂に戻って長椅子に横たわらせる。
聖堂には祐斗、小猫、泰助の他に、リアスも朱乃もいた。先ほど泰助がセルゼンにつけられた傷は朱乃によって治されていた。
「将軍、なんでこんなところに……？」
「詳しい話はあとで。今は堕天使たちの討伐が優先よ」
イッセーは一度地下室に行って、気絶しているセルゼンとレイナーレを引きずって

戻ってきた。
「こいつらがこのアーシアの神器を奪いに来た奴らです。神器は結構強力な回復ができますけど眷族にいれますか!?」
「その前にこの二人を消すのが先よ、分かるでしょう!?」
「行くぞお!」
小猫はレイナーレとセルゼンを拘束していく。戦車(ルーク)の力でかなり強く拘束を行うことができた。朱乃は小猫が拘束している間に魔力で水を作り出し、拘束が済んだところで大量の水をぶっかけた。
「ぶっは! いきなり何よ!?」
レイナーレとセルゼンは悪魔に囲まれていることに気づいた。セルゼンは必死に縄をほどこうとするが、小猫の力によって拘束されてるために不可能だと悟る。
イッセーは近くにワインの瓶が落ちていたのを発見した。
「一発どうだ! お代わりは!」
ワインの瓶でレイナーレの頭を殴りつける。瓶はすでに割れてしまった。レイナーレは少しでも抵抗しようと光のナイフを召喚して縄を切って脱出しようとしている。
「させるか!」
イッセーはレイナーレの右肩を蹴とばすが、かえってレイナーレとセルゼンを脱出す

るに至らしめてしまった。セルゼンは光の剣を繰り出して、近くにいた小猫を無視して泰助に斬りかかる。この判断は悪手でしかなく、後ろから小猫に首を圧し折られてしまった。

「そいつを埋めてきてちょうだい」

「……分かりました、リアス部長」

「ああ、その前に」

パアン！パアン！

イッセーはセルゼンの心臓に2発銃弾をぶち込んだ。

小猫はセルゼンを引きずって外に出ていった。ショベルを見つけたため埋めやすくなった。

「さて、堕天使レイナーレ、この不利な状況でどうするつもりかしら？」

「私には聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）があるのよ、どんな攻撃だって目じゃないわ。」

「それはどうかしらねえ……？祐斗！」

「了解、部長！」

「イッセー、あなたの銃を貸してもらうけどいいかしら？」

「ええ、どうぞ」

祐斗とレイナーレが戦闘を行っている横で、リアスはイッセーのＵＺＩ９ｍｍサブマシンガンを借りて、何かの呪文を唱える。するとどうだろう、サブマシンガンは何やら禍々しいオーラをまとっているではないか。
「そこまでいいわよ祐斗、あとはイッセーにとどめを刺させるから」
バリバリバババババ！
レイナーレに向けてＵＺＩをぶっぱなす。レイナーレは苦しみに耐えきれず泣き叫びながら右往左往している。そのうちにレイナーレは消滅してしまった。ＵＺＩの禍々しいオーラの正体は消滅魔法の一部であった。
「地獄に落ちろレイナーレ……」

レイナーレが消滅した後に聖母の微笑の淡い緑色の光が浮かんでいる。レイナーレを地獄に送ったため解放されたようだ。これをアーシアに返すべきなのだがそのアーシアは生きていない。
「将軍、みんな……俺やアーシアのために振り回して申し訳ない。それに彼女は……」
「イッセー、これが何だかわかるかしら？」
リアスはスカートのポケットからソ連国旗の色のチェスの駒をとりだした。
「最新のコーヒー沸かし器。いや違う、かき氷の機械だ、間違いない。温水装置か？」

「どこをどう見てもチェスの駒でしょうに……。『僧侶(ビショップ)』の駒よ。」
「我、リアス・グレモリーの名において命ずる。汝、アーシア・アルジェントよ。今再び我が下僕となるために、この地へ魂を帰還させ、悪魔へ転生せよ。」
アカ色の僧侶の駒がアーシアの心臓の位置に沈んでいくと同時に聖母の微笑も一緒に戻っていく。少ししてからリアスはアーシアに流していた魔力を止めていく。
「……あれ?」
瞼を開いたアーシアは見覚えのある顔をみつけて体をゆっくりと起こす。
「初めまして、アーシア・アルジェントさん。悪魔をも回復させることのできるあなたの力がほしかったことも私があなたを転生させた理由の一つよ。イッセー、あなたがアーシアを大切に思うなら、護ってあげなさい。先輩悪魔としての責務でもあるわ」
「帰ろう、アーシア」

後日、アーシアはイッセーの家にホームステイすることとなり、また、駒王学園のイッセーと泰助のクラスに転入することになった。
「新兵としての悪魔の生活、これからも頑張っていくぜ!」

Bullet 8

アーシアがリアスの眷族入りして一週間ほど経った。

アーシアもこれから契約を取って悪魔としての仕事をすることとなる。アーシアも泰助やほかの悪魔同様に魔法陣からジャンプできるようだ。

（つまり俺だけジャンプできないのか……軽く泣けてくるやつだな）

イッセーだけなぜか魔法陣からジャンプできないようで、ひたすらバイクで依頼人のもとに行く日々が続いていた。ただし、イッセーにも一定の常連さんというかファンもいる。

神器（セイクリッドギア）は使えているのになぜイッセーは魔法陣ジャンプができないのかいまだに説明がつかないでいることにリアスは頭を抱えている。

アーシアの初依頼はつつがなく完了し、イッセーとアーシアは家に帰ってきた。アーシアは風呂に入っている。イッセーが自室でゆっくりストレッチをしていると、グレモリーのアカい魔法陣が光って、そこからリアスがやってきた。

「イッセー、至急私の処女をもらってくれないかしら？」

（……は？この女は何を言ってるんだ？）

いきなりのリアスの発言に、イッセーは困惑を隠せないでいる。
「ちょっと待てよ待てったら。いきなりそんなこと言われても事情が呑み込めてないんだって」
「私には既成事実が必要なのよ。イッセーが一番適任だと思って。それとも私が相手では不満なの？」
「そんなことは一言も言ってないだろう？言ってる内容に目をつぶれば不満はないが……なんじゃありゃ!?」
床が再び輝きだし、メイド服を着た銀髪の大型機のそそる女が現れる。それを見たリアスはため息をつく。
「……一足遅かったわね」
「こんなことをして破談に持ちこもうという心算でしょうがそうは行きませんよ」
破談、という言葉にイッセーは引っかかった。
「私はこの縁談をお父様やお兄様に認めさせるには何だってやる。これもその一つよ」
「それでも下賤の輩に操を捧げること自体がよろしくないといっているのです。なんにせよ、次期グレモリー家当主なのですから、むやみに殿方に肌を晒すのはおやめください。」
この銀髪のメイドはリアスに上着をかけた後、イッセーの方に向き直る。

「初めまして。私はグレモリー家に仕える者、名はグレイフィアと申します。以後、お見知りおきを」
「イッセー、兵藤一誠です。」
「グレイフィア、あなたが人間界に来た目的は誰の意志かしら？」
「自分も含め、グレモリー家、ひいてはあなたの兄の魔王ルシファーの意志です。」
「そう……厄介な話よね。」
　イッセーはここまでリアスの話について行けないでいる。
「……グレイフィア、私のベースに行きましょう。ブリーフィングはそこで行うわよ。朱乃も呼んで構わないわね。」
「『雷の巫女』ですか。私はかまいません。上級悪魔たるもの、自分の女王（クイーン）を傍らにおいておくことは大事ですから。」
「よろしい。イッセー」
「はい！」
　リアスがイッセーの元へ歩み寄る。
　チュッ――リアスはイッセーの頬に爆弾（キス）を一つ落とした。
「今宵はそれで許してちょうだい。また明日、ね？」
　そういい残してリアスはグレイフィアを伴って魔法陣から移動していく。

イッセーは呆けていると数分後、アーシアがイッセーの部屋に入ってくる。
「イッセーさん、お風呂が空きましたよ」

翌日、基地に行く道中でイッセーは昨日の話を祐斗に聞いてみた。泰助もイッセーと一緒にいる。
「イッセー君が言ってることは恐らく部長の家の話につながってくるんじゃないかな」
そういうと祐斗はバックグラウンドについてはあまり知らないようだ。
基地に入るとリアス、朱乃、小猫の他にグレイフィアがいた。
「全員そろったわね。部活を行う前に重要な話があるの。」
リアスが昨日の話につながる話をしようとした、その時である。
床から突如出火し、その火は魔法陣のような形に燃え上がった。
ピー！ピー！ピー！　シャーーーーー！
火災報知機が鳴りだして、防火用のスプリンクラーが作動した。床は濡れた挙句リアスの眷族たちやグレイフィアが濡れてしまった。
魔法陣の火が収まったところで、中から男が現れた。その男はスプリンクラーの水を浴びてしまった。
「うおっなんで水を浴びせられてるんだ!?」

しばらくすると、スプリンクラーの水が止まって、水にぬれた男が現れる。
「ふう……人間界は久しぶりだ」
よく見るとものすごくチャラチャラした輩に見える。
そいつはリアスの方に腕を回して口をにやけさせた。
「愛しのリアス、会いに来たぜ」
（ずぶ濡れなのが締まらねえ……）